

あの時代の悲しみをくり返してはならない

幼い頃、板の間に父から聞いた言葉



衆議院議員 自民党1期
藤沢 忠 盛

憲法は時代の変化とともに議論され、必要な見直しが必要とされるべき。

靖国の静寂に立つ

四月二十二日、朝八時。私は、念願であった場所に静かに立っていた。

春のやわらかな風が頬をなで、見上げれば抜けるような青空が広がっている。境内の木々はみずみずしい新緑をまとい、都心とは思

えぬほど澄んだ空気が流れていた。大鳥居の前で一礼すると、不思議なほど心が静まっていく。騒がしい東京の真ん中にありながら、ここには人の魂を洗うような厳肅さがある。そう、ここは靖国神社である。

これは私的な参拝ではない。自由民主党所属の国会議員としての参拝である。私は、国家のために命を捧げられた方々に哀悼の誠を

捧げ、不戦と恒久平和への誓いを新たにするため、この場所を訪れた。私は「靖国神社に参拝する国会議員の会」に参加しているが、その思いの根底には、私自身の家族の歴史がある。

私の祖父は警察官で、柔道の達人だったと聞いている。戦時中、輸送兵として南方へ赴き、グアム島やサイパン島で命を落としたという。しかし、戦火の混乱で、

会いたくないの？」父はしばらく黙り込み、神秘的な横顔のまま、ぼつりと言った。「兄弟でも、長く会っていなければ他人のようなものだ」

その言葉を聞いた瞬間、幼心にも言いようのない虚無感に襲われた。戦争とは人の命だけでなく、家族の記憶や温もりまでも奪ってしまうのだと、深く胸に刻

どこで亡くなったかさ定かではない。遺骨も遺品も戻らなかった。祖母は、戦後の混乱のなかで二人の幼い男の子を育てられず、やむなく手放したと聞く。私の父は、父の顔も母のぬくもりも知らぬまま、親戚の家を転々として育った。

幼い頃、板の間に新聞を読んでいた父に、私は尋ねたことがある。「お兄さんがいるのに、

ら、現実の国際社会はそのような理想の状況にはない。力による現状変更が試みられ、国家の安全保障が脅かされる時代に入っている。世界を見渡せば、ロシアによるウクライナ侵略、ホルムズ海峡を巡る不安など、国際秩序は大きく揺らいでいる。こうした現実の中、私は日本国憲法第9条の在り方についても、時代に即した議論が必要であると考えている。八十年前に制定された憲法は、時代の変化とともに議論され、必要な見直しが必要とされるべきである。大規模災害や有事など、国家的危機に備える非常事態条項についても、国民の命と暮らしを守る観点から、冷静で建設的な議論が必要ではないだろうか。それは決して戦争を望むためではない。平和な社会を未来へつなぐための改革である。靖国の静寂の中で、私は改めて誓った。二度と、あの時代の悲しみを繰り返してはならない、と。

1971年生まれ 事務所 豊田市神田町 1-5-9。国立豊田高専卒、同校元非常勤講師。金城学院大学、名古屋女子大学 元非常勤講師 昭和女子大学 環境デザイン学部 准教授を経て 2026年衆議院選挙にて初当選。慶応義塾大学大学院博士号(政策・メディア) 取得、一級建築士。